

# 日本における『三国志』の受容と 「大三国志展」

満 田 剛

## はじめに―「大三国志展」概観

【大三国志展―悠久の大地と人間のロマン―】は、東京富士美術館が企画し、日本国外務省・文化庁、中華人民共和国（以下、「中国」と略す）駐日本国大使館・中国国家文物局などの後援と中国文物交流中心の特別協力をいただいて<sup>1</sup>、2008年5月から2009年3月にかけて日本全国7ヶ所で開催された『三国志』に関する展覧会であり、「大三国志展」実行委員会（東京）には朝日新聞社・NHKプロモーション・東京富士美術館が名を連ねていた。日本での「大三国志展」の開催日程は以下の通りである。

- ①東京（八王子） 東京富士美術館  
平成20年5月3日（土）～7月13日（日）
- ②北海道（旭川） 北海道立旭川美術館  
平成20年7月24日（木）～8月24日（日）
- ③関西（神戸） 関西国際文化センター  
平成20年9月5日（金）～10月5日（日）
- ④九州（福岡） 福岡アジア美術館  
平成20年10月17日（金）～11月16日（日）
- ⑤四国（高松） 香川県立ミュージアム  
平成20年11月26日（水）～12月24日（水）

(74)

⑥中部 (名古屋) 松坂屋美術館

平成 21 年 1 月 2 日 (金) ~ 2 月 1 日 (日)

⑦群馬 (前橋) グリーンドーム前橋

平成 21 年 2 月 11 日 (水) ~ 3 月 15 日 (日)

この「大三国志展」は、2008 年が東京富士美術館開館 25 周年であり、同美術館の新館オープンに加えて、同年が「赤壁の戦い 1800 周年」でもあったことを記念して開催された。さらに、歴史・文学・美術を包括し、現代日本における受容のあり方までも取り上げた『三国志』に関する展覧会はおそらく史上初であり、中国全土の博物館・文化機関から約 150 点の文物、そのうち「国家一級文物」(日本の「国宝」に相当するとされる)は全体の約 3 分の 1 に当たる 53 点(東京展)という価値ある文物を多数そろえていたことから、中国・三国時代の出土品がこれほどまとまってくることは、おそらく今後はないのではないかと考えられることもこの「大三国志展」に重要な意義を与えていたものと思われる。

本論文では、この「大三国志展」の開催の経緯や実際の展示に向けての準備について総括し、中国側の研究者との学术交流や中国・台湾での「大三国志展」帰国報告展について紹介した上で、歴史展示としての「大三国志展」に対する学術アドバイザーとしての筆者の留意点を示しつつ、「大三国志展」の成果と課題について考察したい。

## 1 : 「大三国志展」開催までの経緯について

「大三国志展」開催に関する初出情報としては、創価学会の池田大作名誉会長と中国・王毅駐日大使(当時)の会談を報じる『聖教新聞』2006 年 6 月 30 日付けの一面記事が挙げられる<sup>2</sup>。

また、黄山美術社社長の陳建中氏は 2007 年 7 月の時点で「三国志をテーマにした新しいタイプの展示会を、東京富士美術館(東京都八王子市)に協力してもらって開催」<sup>3</sup>すると発言しており、これに拠ると黄山美術社から

東京富士美術館に『三国志』に関する展覧会開催を持ちかけられたものと思われる。

その後、2006年秋から2007年6月にかけて東京富士美術館の野口満成館長(当時)や学芸員の方々による中国での3回の調査が行われた。その際、東京富士美術館の一行は約70箇所の博物館や遺跡を訪れ、16000キロの道のりを踏破されたとのことである<sup>4</sup>。

2007年6月、筆者に「大三国志展」学術アドバイザーの打診があり、同年8月に正式依頼があった。当初の依頼内容は、展示全体の監修、展示内パネルでの人物紹介文や図録<sup>5</sup>の巻末資料の一部(『三国志』の指導者論)(仮題)などの執筆、図録に論文を執筆していただく研究者の方々の紹介であった<sup>6</sup>。

巻末資料に関するアイデアを出し合った結果、「『三国志』人物事典」・『三国志』豆知識・『三国志』年表の執筆も追加依頼され、1週間から2週間に一回のペースで美術館に伺い、様々な打ち合わせを行った(2008年になってから、各パートの解説文も執筆することになった)。その他の打ち合わせ内容としては、下記の内容の他にサブタイトル決定、展示構成、ロゴの決定などが挙げられる。

## 2:「大三国志展」の準備や広報について

実は、中国文物交流中心副主任(2009年当時)であった楊陽氏によると、「大三国志展」の20年ほど前にも、日本での『三国志』に関連する展覧会の話があったとのことである。しかし、日本側の担当者が展示予定の文物を見て、そもそも三国時代が短いことに加え、戦乱のため、真に目を奪われるような出土文物が少ないことに非常に失望し、曹操の父のものと思われる銀縷玉衣も早期の文物であることから、日本側が展覧会の失敗を懸念して、計画が中止になったとされる。その後、2004年から2005年10月にかけて韓国・ソウルのロッテワールド民俗博物館で「英雄時代展」と題する『三国志』に関する展覧会が開催され、関羽の大刀を複製し、来場者が持てるようにするなどの

工夫がなされ、大量のアニメーションができ、記念品も多く作られたが、成功したとは言えず、来場者数は伸びなかった、と楊陽氏は述べられている<sup>7</sup>。

ここまで述べてきたことを展示の準備段階で留意した上で、東京富士美術館の学芸員は、できるだけ多くの来場者を集めるということも重要視して展覧会を企画していた。そのことは、筆者が正式に関わる前の2007年7月時点での企画書にも、実際の「大三国志展」と同じタイトルが記されており、「ロマン系」の展示<sup>8</sup>を志向されていることから理解できる。

その中で、現代の日本において『三国志』が幅広く普及してはいるものの、有している知識は個人々人によってまちまちである<sup>9</sup>ことや、もともと東京富士美術館の主な観客層が『三国志』に関連する歴史書・小説などにあまり興味を持っておられないと思われる40～50歳代の婦人であることから、特定の観客層を想定することが難しいと考えられていた。ともすれば、来場者の大半が歴史書『三国志』・『三国志演義』について全く知識のない人々であろうということも想定されたためでもある。

したがって、まず展示・図録（カタログ）については、先に述べたような、現代日本における『三国志』の受容の状況を考え、文章を簡潔でわかりやすいものにしようとするのは当然として、『三国志』に全く知識のない方や小説・漫画しか知らない方にも楽しんでいただけるように、最初に物語（小説）などの展示パート（「物語でたどる三国志」）を設け、次のパート（「出土品でたどる三国志」）で出土品（史実関連）を展示しようと構想されており、筆者もそれに賛同した。

展示の具体的な構成を考える際に、中国国家文物局を通してお借りする文物の目録を確認しつつ、学芸員は東京富士美術館創業者である池田大作氏の『三国志』に関する著作・スピーチを読み込んでいた。その後、筆者も加わって、池田大作氏の著作・スピーチにおける『三国志』に関する内容を精査した結果、様々な登場人物の中でも諸葛亮を取り上げたものが多いこと、特に1991年以降2007年までの新聞記事となったスピーチなどでは、諸葛亮に関する内容がほとんどであったことが判明した<sup>10</sup>。さらに、吉川英治氏も『三

『三国志』の末尾にある篇外余録で

ひとくちに言えば、三国志は曹操に始まって孔明に終る二大英傑の成敗争奪の跡を叙したものだともさしつかえない。<sup>11</sup>

と述べているように、中国・三国時代の歴史的な潮流を作り上げた人物の一人として諸葛亮を挙げている。以上のことを踏まえて、物語のパートについては、2007年7月付けの企画書の段階で、東京富士美術館の学芸員から、「桃園の誓い」「三顧の礼」「赤壁の戦い」「星落秋風五丈原」と題し、『三国志演義』や吉川英治『三国志』（以下、「吉川『三国志』」と略す）の話の展開に沿ってまとめ、このパートの「影の主人公」を諸葛亮としてまとめるとの提案があり<sup>12</sup>、筆者も賛同した。

出土品については、『三国志演義』や吉川『三国志』などの物語はおろか、陳寿『三国志』などの史書ともなかなか結びつかないものも多かったことなどから、池田氏の著書やスピーチの視点と関係にこだわらず、時代順ではなく、「戦う」「治める」「生きる」と題して、当時の武器や生活などをわかりやすく伝えることができるようにまとめる努力をした。また、「国家一級文物」には、展示パネルにそれを示すマークを付け、重要文物であることをわかりやすくした<sup>13</sup>。

物語のパートの「星落秋風五丈原」では、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の協力により提供していただいた精細な衛星写真に基づいて、白色の五丈原のジオラマ（地形模型）を制作し、諸葛亮の本陣の場所や蜀漢・曹魏両軍の動きを示す動画をコンピューターで作成して、その五丈原の地形模型に真上から投射することで、五丈原の戦いを動的に表現しようとした。加えて、「星落秋風五丈原」の音楽・歌とともに、『三国志演義』で諸葛亮が亡くなったとされる日の星空を復元した画像<sup>14</sup>と出師の表を、模型の後ろの三面のディスプレイに交互に表示する諸葛孔明・五丈原コーナーを設置して、諸葛亮の「苦心孤忠」を観客にイメージしていただくことを目指した<sup>15</sup>。

また、NHKエンタープライズの方々との打ち合わせをした美術館の方々のアイデアから、若手俳優が曹操・劉備・孫権を演じた映像をNHKエンター

プライズに依頼して制作し、シアター会場で放映することとなった。これは、東京富士美術館の学芸員が、展示室のモノ・映像・文字などを見ていただくだけでは、ただ「知る」だけで終わってしまい、実感を得ていただくことに限界があるのではないかと考えたことから、俳優が演じる“人物”に語りかけさせる「番組」を作ろうと企画されたものである<sup>16</sup>。また、東京富士美術館の主な観客層が40～50歳代の婦人であることに加えて、「女性を引き付けければ、お子さんやご主人も来場される」と考えて、若い女性や主婦の皆さんを対象とした試みでもあった<sup>17</sup>。

この映像を作成するに当たっての注意点としては、物語だけではなく出土品の展示もあることから、『三国志演義』や吉川『三国志』などではなく、できる限り歴史書『三国志』及び裴松之注に沿った人物紹介を心がけたことが挙げられる。また、この映像の主人公たちの中で、五丈原の戦いの時点で存命だったのが孫権のみであることから、孫権の映像で五丈原の戦いを取り上げたが、「孫権から見た五丈原の戦い」という描き方は初めてではないかと考える。

その他、シアター会場では、映画『レッドクリフ』Part 1のCMや日中合作アニメ「三国演義」のパイロット版も放映された。また、八王子展のみであるが、NHKエンタープライズが制作した映像に出演した若手俳優と筆者とのトークショーをシアター会場にて4回開催し、さらに二胡のコンサートや『三国志』に関連する落語会なども開催するなどして集客に努めていた。

加えて、展示に関する音声ガイドも作成され、希望者に機器をレンタルする形で提供された。ちなみに、展示室内にも映像に出演した若手俳優が『三国志』に関する名所を案内するような映像を流して、ナビゲーター役とする案<sup>18</sup>もあったが、これは実現しなかった。

そもそも東京富士美術館の企画を担当された方々には、「この「大三国志展」の展示・図録を見れば、展示開始時点での日本における『三国志』の受容について網羅できる」ものにしようという狙いがあった。そこで、最初は日本での『三国志』に関する小説・マンガ・ゲームなどを網羅して展示すること

を企画したが、展示スペースが足りなくなることなどの事情により、小説は吉川『三国志』、マンガは横山光輝『三国志』や『BB 戦士三国伝』<sup>19</sup>のみとなり、ゲームは取り上げることを断念した。また、図録には展示物の画像・映像などのDVDを付け加えることも企画したが、これも諸事情から実現しなかった。

このような様々なアイデアを実行し、わかりやすい展示を目指す一方で、筆者が危惧したのは、展示の文章などを簡潔にしすぎると、多数来場することが予想された「『三国志』マニア」と称することができるような非常に詳しいファンの中には、「この程度の文章しか書けないのか」、「水準が低い」と評価し、しかも（全てが妥当なものとは限らないであろう）その評価をインターネットのホームページやブログで発表されてしまう可能性が高いことであった。加えて、「歴史と文学の両面から「三国志」の世界を総合的に紹介する“世界初”の試み」<sup>20</sup>とされるこの展覧会を、中国史をはじめとするさまざまな学問分野の研究者が多数鑑賞することが予想されており、そのような研究者の方々の評価に耐えうる展示を作り上げる必要もあった<sup>21</sup>。

そこで、展示パネルなどの文章はできるだけ簡潔にまとめ<sup>22</sup>ながらも、研究者や熱狂的なファンにもある程度満足していただける水準の内容を随所に散りばめることに留意した。同様に、図録の「『三国志』人物事典」も、最新の研究成果をおさえつつ、わかりやすさや読みやすさを考え、最初にそれぞれの人物の性格などをワンフレーズでまとめ、一人当たり200字前後で紹介しようとした。

「大三国志展」の広報に関連して、研究者の中にも自らの研究成果の公開などをホームページやブログ（Weblog）で行う方々が増えてきており、一般でも日記などとしてブログを運営する人々が増えていたことから、筆者自身のブログを作成し、そこで「大三国志展」の準備状況などを部分公開し、展示計画に関する意見を募ることを提案したところ、美術館のホームページに

リンクする「[大三国志展] ブログ」を設置していただくことになった。

このブログは、窓口になるページから館長・研究者・愛好家の三人のブログに入るようなシステムになり、文章の分量は1画面から2画面で、できれば1画面以内とすること、館長ブログは準備のための旅行記で、2週間に1回の更新となることが決められた。加えて、愛好家<sup>23</sup>のブログは主に『三国志』にまつわるイベントやニュースなどの紹介を主な役割とし、筆者が担当した研究者ブログは『三国志』に関連する事柄を研究者の視点から述べていくこととなって、2007年11月7日にオープンした<sup>24</sup>。

実際の研究者ブログでは、後漢末期から三国時代の人物の紹介や赤壁の戦いなどの三国時代の有名な戦いについての研究者の視点からの解説などの記事を書くこととなった。準備状況の部分公開については、先述の五丈原のジオラマの紹介をさせていただいたが、展示計画への意見募集は諸事情によってできなかった。さらに、ブログの内容をまとめて出版する企画もあったが、これは実現しなかった。

### 3：「大三国志展」の総括—「大三国志展」学術討論会

「大三国志展」の入場者数は全国7会場で合計101万人以上となり、特に東京と神戸は29万人を突破するなどの成功を収めた。

この展覧会を総括する「大三国志展」学術討論会が2009年3月14日に東京富士美術館会議室において開催された。

中国からは以下の方々が「大三国志展」学術交流団として参加された<sup>25</sup>。

羅伯健団長（中国文物交流中心主任）

高大倫先生（四川省考古学研究院院長）

馬宝烈先生（遼寧省博物館館長）

師建民先生（甘肅省博物館）

日本側からは、東京富士美術館の野口満成館長と主事（学芸員）・学芸員

それぞれ1名に加えて、筆者が参加した。通訳は黄山美術社社長の陳建中氏が担当してくださった。

討論会の最初に、野口館長・羅伯健団長からの挨拶があり、その後、高大倫先生と馬宝烈先生の発表があった。

高先生は「民間三国・文学三国・文献三国・考古三国」と題して発表された。まず四川大地震による四川省の遺跡の破壊状況を、写真(パワーポイント)を使って紹介していただいたが、そこでは「地震が起こった地帯が諸葛孔明の北伐ルートと重なる」とのお話もされていた。

民間伝承における『三国志』については、諸葛鼓(諸葛孔明が軍で使ったとされる銅製の太鼓)や武侯歇馬石(南征軍が休んだとされる場所の崖に宋代に刻まれた文章がある)といった諸葛孔明の南征に関するものを紹介された。ちなみに、高先生のご実家は諸葛孔明の南征のルート沿いにあるとのことであった。

さらに、『三国演義』が中国の著名人に与えた影響や陳寿『三国志』の概説があった上で、考古学から見た『三国志』について述べられたが、「『三国志』を本当に知るには考古学上の成果を学ばねばならない」という趣旨のお話もされていた。

次に、凉山昭覚三国軍屯遺址を写真で紹介された。ここは2000年に発見された諸葛亮の南征関連の遺跡で印や土器が出土しているが、(この発表の時点では)まだ発掘されていないとのことであった。

また、四川省考古学研究院が成都武侯祠博物館と協力し、諸葛孔明の南征・北伐に関する遺跡を3年がかりで発掘する計画があったが、(これもこの発表の時点では)大地震でストップしていると述べられていた。ただ、計画がなくなったわけではないので、これから再開する努力をしたい、とも話されていた。

四川の遺跡では墓葬も重要であり、三国時代のものでは楽山麻浩崖墓があり、ここには蜀漢の年号が刻まれているだけでなく、仏像も刻まれていると紹介された。

加えて、最近の中国での「三国熱」には日本からの影響（日本へ行った留学生が日本の小説・漫画『三国志』を持ち帰ったことから始まる）が非常に強いのではないか、との見解を示された。

続いて、馬宝烈先生は「仇英〈赤壁図〉簡析」と題して発表された。パワーポイントを使用しつつ、仇英の「赤壁図」と蘇軾の「赤壁賦」・『後赤壁賦』との関連について述べられた後で、現存する仇英の〈赤壁図〉は、上海博物館のものと2007年にオークションに出てきたもの、そして遼寧省博物館のものと三つあるとのことで、書かれた年代の順はオークション版（35歳頃の作品）、上海博物館版（45歳頃の作品）、そして遼寧省博物館版（50歳頃の作品）であるとのことであった。

日本側からは、東京富士美術館の学芸員が展示の様子をスライドで示しながら、展示における具体的な注意点などを報告された。その内容を踏まえた上で、筆者が日本での『三国志』に関する研究状況や日本での『三国志』の受容のあり様をお話し、ここまで述べてきたような「大三国志展」準備段階での留意点・工夫点について解説した。

その上で、中国側からの「大三国志展」の総括として、まず高大倫先生は「大三国志展」のスタッフが三国時代の歴史や小説に関する研究者の意見を聞き（少なくとも四川省ではそのような展示はない）、研究史の詳細を踏まえた上で、鑑賞者層についても正確に把握し、配慮した展示を心がけたことや、展示の前半部分で物語を語る雰囲気を作って鑑賞者をひきつけ（中国では“国宝”を出すことだけでひきつける）、物語から歴史へという流れをつくっていたこと（中国では単純に歴史の流れに沿って「一直線」に展示）を長所として指摘していただいた。また、記念品ブースが良いアイデアだとも述べておられた。

続けて、羅伯健団長は「鑑賞者層が『三国志』にどのように触れているか」などの社会的背景を含めた様々な要素を考えた展示テーマの選択がなされたことなどを指摘され、学術的に最先端のものと定着しているものを使い分け、歴史と文学を結びつけて展示されていたことが成功の要因、と述べられた。

さらに、中国では一般的に「科学的」展示を心がけ、文物で貫こうとするため、面白く紹介することが難しいが、この「大三国志展」では歴史と文学を結びつけたところが“新しい”試みであり、シルクロードに関する展覧会などでも参考にしたいとも述べられた。

以上のように、予定の時間を大幅に超過するほどの熱のこもった議論が交わされ、有意義な討論会となった。

#### 4：「大三国志展」帰国報告展」について

日本での高評価などの成果を受けて、2009年4月以降、上海・武漢・杭州・北京・鄭州・台北・成都を1年かけて巡回展示した<sup>26</sup>。中国・台湾での開催日程は以下の通りである。

①上海	上海図書館	2009年4月13日～5月17日
②武漢	湖北省博物館	2009年5月28日～8月7日
③杭州	良渚博物館	2009年9月15日～11月15日
④北京	国家大劇院	2010年1月15日～3月15日
⑤鄭州	河南博物院	2010年4月1日～5月15日
⑥台北	台湾国立歴史博物館	2010年6月5日～9月5日
⑦成都	四川博物院（旧・四川省博物館）	2010年9月28日～11月28日

タイトルは各地で微妙に異なっており、上海では「中華智慧的文化符号—「大三国志展」帰国匯報展」<sup>27</sup>、武漢・杭州では「千古英雄—「大三国志展」帰国匯報展」<sup>28</sup>、北京では「赤壁懷古—「大三国志展」帰国匯報展」<sup>29</sup>、鄭州では「英雄時代—「大三国志展」帰国匯報展」<sup>30</sup>、台北では「英雄再起—大三国志特展」、成都では「大三国志展—蜀漢巡礼」というタイトルになった。

これらの「大三国志展」帰国報告展」に対して、東京富士美術館からは五丈原の地形模型をはじめとする諸葛亮・五丈原コーナーなど数点を出展し、

上海では正子公也氏による諸葛亮などの絵画も展示されたとのことである。

物語のパートと歴史のパートに分けるという展示構成は中国各地や台北での「大三国志展」でも継承されていたようである。ただ、台北での展覧会では、「生活経済」、「英雄崛起」、「工藝技術」、「戦争軍事」、「文化藝術」、「後世典故文創」という6つのパートに分けられており<sup>31</sup>、諸葛亮の3D映像も映されていた<sup>32</sup>とのことである。

また、展示されている文物であるが、日本での「大三国志展」において中国側から提供いただいたものは、全ての会場でほとんど展示されていた。物語のパートについて、日本での「大三国志展」において日本国内の博物館等から出品していただいたものは、中国・台湾には出品されていない。したがって、物語のパートの展示物は新たに中国側で出品されたものもある<sup>33</sup>。

日本での「大三国志展」の“成果”は帰国報告展でも活用されたようで、台北での展覧会では宣伝にあたって、著名人・芸能人などが多数参観しており<sup>34</sup>、トークショーも開催され<sup>35</sup>、『三国志』に関するコンピューターゲームとも連携していたようである<sup>36</sup>。また、成都展では易中天氏による『三国志』に関する講座が開催され<sup>37</sup>、『三国志演義』や『三国志』に関するコンピューターゲームに基づいた諸葛亮や関羽などのコスチュームプレイをしておられる人々が開会式に参加していたことも興味深い<sup>38</sup>。

## 5：筆者個人の「大三国志展」における留意点

### — 「歴史学と“商品化された虚構の過去”の狭間」

『北京週報日本語版』2009年4月10日の記事・「1700年の時を超える文物と映像 大三国志展」<sup>39</sup>において、沈伯俊氏（四川省社会科学院研究員・中国『三国演義』学会常務副会長）は「「三国の歴史の発展を取掛かりにして、それを敷衍したものを主な内容とした」このような展示は非常に面白いが、文化界・博物館界では極めて珍しく、やむを得ない苦衷があるとすら言える」<sup>40</sup>と述べており、加えて以下のような、極めて妥当なものだと思われる見解も示されている。

「三国時代が184年の黄巾の乱から始まり280年で終わったとすると、わずか100年足らずだが、この100年間には次々と戦乱が発生し、残された本当の三国時代の文物は少ないうえにも少ない。博物館の純粋な文物という視点から見ると、このような三国文物展を開催するのはとても居心地の悪いことで、はなから開催など考えられないとすら言える。」<sup>41</sup>

「実は、三国時代を純粋に史学的な文物の視点から見ると、見るべきものはとても少ないと言える。しかも、三国時代の文物は決して際立ったものではない。三国時代に残された文物は基本的には漢代のスタイルを踏襲しているうえ、今なお残っているものはとても少ない。成都の武侯祠も含めて本当の文物は非常に少ない。三国に関する展示には何らかのあいまいさがつきものだ。たとえば、今回の展示では、後漢の一部の品も三国の文物とされている。」<sup>42</sup>

(「大三国志展」に関わった者ではあるのだが) 研究者である筆者自身も、沈氏の見解のような理由で、このような展覧会については考えもしなかった。さらに、金子淳氏は「ロマン系」の展示によって提示される歴史について、「ある特定の人物や事件に照準を合わせ、そこから立ち上がる「物語」への接近という形をと」<sup>43</sup>り、「歴史上の人物を現在の会社組織や家族に見立てて、理想の上司像や配偶者像になぞらえて理解するという受容者側の行為も、まさにこの「物語性」への接近として理解することができ」<sup>44</sup>るが、その「物語」は「『今』という時間に連続する過去ではなく、そこから切り離された懐かしがられるためにある虚構の過去」であり、……、その「虚構の過去」が「情報の商品として誰にでも消費可能になった」<sup>45</sup>ものであって、「すなわち購入すべき「商品」であり、懐かしさやロマンなるものは、過去に対する感覚のあり方というより、歴史という「商品」を消費する際の一つの形態に過ぎないという側面がある」<sup>46</sup>と指摘する。加えて、金子氏はそのように“商品

化された歴史”が表象するのは「現在の価値観によってフィルタリングされた要素に基づいて構築された歴史像であり、そこで提示された参照枠は、来館者の受容する歴史像をも規定しうる構造となっている」<sup>47</sup>と指摘し、このようなロマン系の展示における「物語」が博物館としていかに表象され、そして来館者によってどのような歴史像として受容され得るか、ということ<sup>48</sup>について考えなければならないとも述べておられる。

このような問題がある中で、東京富士美術館の皆さんをはじめとする「大三国志展」の企画立案に関わられた全ての方々の発想と「勇氣」があったればこそ、今後の中国関連の展示に大きな影響を与える展覧会を開催することができたのである。

その前提の上であるが、ここまで紹介した沈氏の「三国時代の文物かどうかははっきりしない文物や前後の時代の文物も多く、三国時代の文物展を開催することなどはなから考えられない」とする見解や金子氏の見解が示す「歴史学が扱う『今』という時間に連続する歴史」と虚構の過去である“商品化された歴史”の狭間<sup>49</sup>の問題こそが、「大三国志展」の準備において筆者が最も注意を払ったことであった。

「大三国志展」では、『三国志』をもとにした物語やマンガ、コンピューターゲームに触れているものの歴史書『三国志』や歴史上の三国時代そのものに興味のない方々か、『三国志』に関するこれらのもの全てにも触れたことのない方々が多数来場されることを想定する以上、“物語”のモデルとしてもともと存在する『三国志演義』(当然、この物語自体が元末明初以降、儒教の「義を演べる」ために『三国志』の物語をモチーフとして作られた“商品化された虚構の過去”である<sup>49</sup>)に基づいて、来場者が理解しやすい“物語性”を構築することを選択するのは自然であったが、現在の価値観、なかんずく物語のパートが諸葛孔明を軸とする展示であることなどに示されるような展示企画者の価値観に基づいて、学問としての歴史学が追求するものとは異なる“商品化された虚構の過去としての歴史”を新たに生み出すことにもつながってしまいかねなかった。これも金子氏が指摘するように、「歴史の専門家

……が、……個人の内面におけるさまざまな葛藤とは無関係に、その商品化に「加担」せざるを得ない状況にあ<sup>50</sup>ったのである。

展示構成の考案、展示パネル原稿や図録の執筆にあたって、筆者はまず物語のパートでの後漢末から三国時代の概説では『三国志演義』の記述を典拠とし、それ以外の物語やマンガなどの創作物、あるいは『三国志』などの歴史書との比較を行うというスタイルにこだわるようにした。そもそも、この「大三国志展」での物語のパートは、言い換えるならば、「商品化された虚構の過去としての歴史」である『三国志演義』のさらなる“商品化”の歴史」を扱った展示である。であるならば、筆者はあくまでも『三国志演義』をベース・基準とした上で、それをもとに作られた絵画や彫刻、書や詩などが、作者自身の生きていた“現代”的価値観に基づいて、どのように中国や日本で創作されてきたかを示すように心がけた（正子公也氏をはじめとする現代の日本人の画家の皆さんが想像力を膨らませて描いた諸葛亮などの人物のイラストなどは、それはそれで日本における『三国志』の受容のあり方の一端を示すものであり、物語のパートの展示物としては価値あるものだと考える）。

また、歴史のパートでは、沈氏が指摘するように三国時代の出土文物が必ずしも多くないことを理解した上で、前後の時代の文物であることも明記しつつ、それらの文物から三国時代当時の武器や生活などを推定しながら、先述のように、時代順ではなく、「戦う」「治める」「生きる」などと題して社会的にわかりやすく伝えることを意図した文章を書こうと努力した。加えて、歴史書『三国志』及び裴松之注をベースとし、「大三国志展」開催当時の最新の研究も踏まえつつ、できる限り文物と史料に“語らせる”ことを目指した。

つまり、物語と歴史のそれぞれのパートで、観客数の増加を第一義として来場者の“感覚”に阿り、来場者が抱く憧れやイメージに沿った新たな歴史・物語の“商品化された虚構の過去”を生み出すことを、少なくとも展示の文章の中では極力避けようとしたのである。筆者の意図したことが、来場者における『三国志』の歴史像の受容に価値ある影響を及ぼすことができている

ば幸いである。

今後は、「大三国志展」のように、鑑賞者層の社会的背景を含めた様々な要素を考えた展示テーマの選択と歴史と文学などのような異なる分野を結び付けた展示が日本や中国でも盛んになることが予想されるが、その結果起こることが想定される（先述のような）「ロマン系」の歴史展示に関連する問題への対応が課題となるであろう。

おわりに

池田大作氏と王毅氏の対談の中で開催が発表された「大三国志展」では、韓国での『三国志』に関する展覧会の成果と課題を踏まえた上で、展示される「モノ」が持つ高い価値を生かしつつ、観客の『三国志』への認知度やニーズを把握し、映像や音楽なども生かして感覚にも訴えることに注意して、物語のパートと歴史のパートの2部に分けて展示を構成しようとした。また、新聞などのマスコミだけでなく、ブログなどを使ったネット上での広報にも留意した。

筆者個人としては、この「大三国志展」は副題からもわかるように「ロマン系」の展示であることや「もともと三国時代の文物が少なく、研究者としては『三国志』に関する展覧会を開催することを考えにくい」という沈伯俊氏の見解を踏まえ、「歴史学が扱う“『今』という時間に連続する歴史”と虚構の過去である“商品化された歴史”の狭間」を意識して、物語のパートでは『三国志演義』、歴史のパートでは歴史書『三国志』及び裴松之注などの史書の記述を典拠とすることに拘り、歴史・物語の“商品化された虚構の過去”を新たに生み出すことを避けて、展示パネルや図録の文章執筆を心がけた。

本稿で述べたような努力の結果、全国7カ所で開催者数が100万人を突破し、その結果、「大三国志展」の帰国報告展が中国や台北で開催されるなどの成果を挙げることができた。「大三国志展」は日中の交流のために貢献しただけでなく、「国家一級文物」を展示パネルにマークで示すなどの展示の工夫などが日本における中国関連の展示のあり方に影響を与え、「大三国志

展」帰国報告展などを通して中国における博物館展示をも変えてしまう可能性を秘めている。

「大三国志展」の成果が日本や中国などにもたらした影響について、これからも精査し、考えていく中で、今後の学術・文物の交流や日本と中国の友好関係構築に少しでも貢献したいと考えている。

- 1 中国の文物出品協力機関は以下の通りである。
  - [北京市] 故宮博物院, 首都博物館, 北京芸術博物館, 中国社会科学院考古研究所
  - [天津市] 天津博物館
  - [河北省] 定州市博物館
  - [江蘇省] 南京博物院, 南京市博物館
  - [安徽省] 安徽省博物館, 馬鞍山市博物館, 亳州市博物館
  - [河南省] 河南省博物院, 洛陽博物館, 焦作市博物館, 南陽市博物館, 南陽市漢画館, 新郷博物館
  - [湖北省] 湖北省博物館, 鄂州市博物館, 赤壁市博物館, 武漢博物館
  - [湖南省] 湖南省博物館
  - [四川省] 四川省博物館, 成都市新都区文物管理所, 四川省文物考古研究院, 新都県文物管理所, 広漢市文物管理所
  - [陝西省] 陝西歴史博物館, 西安碑林博物館, 漢中市博物館
  - [甘肅省] 甘肅省博物館, 高台県博物館
- 2 2006年9月30日の聖教新聞1面参照。
- 3 中国国際放送局「CRI online」HPインタビュー記事(2007年7月19日)「日本で活躍する中国人・陳建中氏」(上)(<http://japanese.cri.cn/205/2007/07/19/1@98791.htm>)参照。
- 4 野口満成「『大三国志展』現地調査紀行 プレ三国志展ツアー」(『東京富士美術館研究誌 ミューズ』第5号 東京富士美術館 2011年)参照。
- 5 満田剛〔監修〕『『大三国志展』カタログ』(東京富士美術館 2008年)。
- 6 結局、図録の論文は歴史学・考古学を中国側が、文学を日本側が執筆することになった。
- 7 この段落については、主に2009年4月18日付けの『上海証券報』・『大三国志展』実現した文物展の突破一訪中国文物交流中心副主任楊陽(記者 邱家和)に依拠している。さらに、上記の記事の中で楊陽氏は、日本と韓国の違いとして、日本人の方が韓国人よりうまく経営でき、日本の方が韓国より社会基盤がしっかりしていることや、中国文物の展覧会が韓国では兵馬俑展以外成功したとは言えないのに比べ、

日本では百回ほどの展覧会で数多くの成功を取めていることに加え、日本人が記念品や図録に関心を持ち、中国文化を父なる文化として認めているという国民性を持っていることも指摘されている。

- 8 金子淳「博物館の「危機」と歴史展示—懐かし系／ロマン系展示から見る歴史系博物館の課題—」〔以下、「金子前掲論文」と略す〕(『歴史学研究』838 2008年)では、博物館展示における「ロマン系」について「大河ドラマに代表されるような「歴史ロマン」の要素が演出され、「大河ドラマとの連動企画や、時代劇の世界観と一体化させたような展示」と定義し、「こうした世界観とコミットし感情移入したという欲求を持つ来館者にとっては垂涎の的となる」とされている。加えて、このような展示は、常設展よりも圧倒的に特別展・企画展が多いが、「共通しているのは、いずれも集客の切り札として戦略的に企画・実施されるという性質をもつということであろう」とも述べられている。このような定義によれば、「大三国志展」は紛れもなく「ロマン系」の展示である。
- 9 日本における小説・マンガ・ゲームなどでの『三国志』の受容については、雑喉潤『三国志と日本人』(講談社 講談社現代新書 2002年)、拙著『三国志—正史と小説の狭間』(白帝社 2006年初版, 2009年第2版)第一章・「正史『三国志』と小説『三国志演義』」や拙著『三国志 赤壁伝説』(白帝社 2009年)などを参照。
- 10 1991年3月4日～2007年4月13日の聖教新聞に掲載された池田大作氏のスピーチ・対談などで『三国志』が取り上げられた85件の中で扱われている人物(名前が挙げられているだけでなく、発言・文章やエピソードが述べられているものに限る)としては諸葛亮が33件と圧倒的に多く、次いで孫権と劉備・関羽・張飛(桃園の誓い関連)の4件、曹操の3件、関羽の2件、劉備・盧植・周瑜・曹植・倉慈・五虎大將軍のそれぞれ1件となる。
- 11 吉川『三国志』(本論文では吉川英治〔著〕『三国志』第1巻～第8巻(講談社 講談社文庫 1980～81年)を底本とする)第8巻332頁。
- 12 一部の方からは「諸葛孔明展」にすべきだ」との意見もあったと仄聞している。
- 13 この影響かどうかは定かではないが、2012年に東京国立博物館・平成館などで開催された「特別展 中国 王朝の至宝」でも「一級文物」を示すマークが付けられている。
- 14 小説『三国志演義』で諸葛亮が亡くなった日は建興12年(西暦234年)8月23日とされているが、これを太陽暦に直すと同年10月3日となる。そこで、国立天文台より提供していただいた西暦234年10月3日の五丈原から見えたであろう北方の星空の映像を示した。
- 15 2009年4月11日付けの『上海証券報』・「当古代文物展変身当代文化事件 沒有稀世珍宝却吸引了100万観衆, 当事人細説《大三国志展》成功奥秘」(記者 邱家和)では、黄山美術社の代表の夏伊若氏にインタビューした内容として、ここまで述べてきたような工夫について記されているが、展示構成を考える現場に携わっていた

- 東京富士美術館の方々や筆者に関する記述はない。ちなみに、筆者は夏伊若と名乗る人物にお会いした記憶はない。なお、この記事では、池田大作氏と王毅駐日中国大使(当時)との対談の中で「大三国志展」開催が発表され、日本での発行部数第三位の新聞である聖教新聞において、その発表も含む「大三国志展」に関する記事が掲載されたことも記している。
- 16 ちなみに、NHK大河ドラマ『新撰組』では、若い女性が歴史上の人物と俳優をダブらせ、興味を持ってファン・“おっかけ”となり、関連イベントは満席となるなどの社会現象が起きて、新撰組についてだけ詳しくなる人々も現れたとの話を仄聞している。
  - 17 東京富士美術館の方々が入内に常連の観客の皆さんに伺って調査したところ、『三国志』に関心を持つ女性が少なかったため、観客者数も減少することが危惧されていた。そこで、「大三国志展」にあわせて、中華街の方とともに「中華フェスタ」を開催しようかと検討されていたことがあった。
  - 18 東京都美術館での『よみがえる四川文明～三星堆と金沙遺跡～』で女子十二楽坊がナレーションを行っていたことから着想を得たものである。
  - 19 『機動戦士ガンダム』シリーズに登場するモビルスーツと呼ばれる人間型のロボットの二頭身から三頭身で表現したキャラクターが人格を有し、『三国志演義』に基づいた物語の登場人物を演じるという設定の漫画・アニメである。ちなみに、「大三国志展」開催中のミュージアムショップで最も売れたのは、この漫画・アニメのプラモデルであった。
  - 20 『東京富士美術館ホームページ』・「大三国志展」特設サイト (<http://www.fujibi.or.jp/assets/files/exhi/sangokushi/index.html>) 参照。
  - 21 実際、新潟大学教授の關尾史郎氏はご自身のブログ(『關尾史郎のブログ』・「大三国志展」<http://sekio516.exblog.jp/8001134/>)に、「前半部分の「人間のロマン—物語でたどる三国志」は素通りし」と記しておられ、本論文注8で述べたような「ロマン系」の展示の典型例である「大三国志展」の物語のパートには見向きもされていなかった。
  - 22 展示物それぞれのパネルの文章は、120字を目安としてまとめられていた。中国からの文物については、中国側からいただいた中国語の解説文を日本語に訳し、それを120字程度に短くしながら、必要に応じて手を加えていった。
  - 23 この“愛好家”として、『英傑群像』の岡本伸也氏がブログ執筆を担当された。
  - 24 『大三国志展ブログ』(<http://www.fujibi.or.jp/3594blog/>) 参照。
  - 25 この学術交流団の方々には「大三国志展」前橋展を観覧していただいただけでなく、2009年3月14日の「大三国志展」来場者数100万人突破記念セレモニーにも参加していただいた。
  - 26 中国での「大三国志展」帰国報告展については、株式会社黄山美術社のホームページの「大三国志展(中国)」にも記載がある (<http://www.kouzan.jp/service/>)

sangokuc.html)。

- 27 2009年4月13日付けの『文滙報』・「《大三国志展》帰国滙報展今起展出 百余文物“復原”三国勝景」では、34の中国の博物館などから117件の文物が出展されていることが述べられ、曹操の「袞雪」の拓本や銀縷玉衣について記している。
- 28 2009年9月18日付けの『中国文物報』・「千古英雄—大三国志展”在良渚舉辦」によると、杭州での「大三国志展」では中国全土から117点（そのうち、国家一級文物は52点）の文物が集められたとされている。また、展示が史学と文学に分けられ、内容は三国文化、軍事と政治、経済生活、精神と芸術を包括し、文物の年代は三国時代から明清代に跨ると記されている。
- 29 『中国文物報』(2010年1号 2010年1月)・「“大三国志展”帰国滙報展再掀熱潮 国家大劇院展開“赤壁懷古”画卷」では、34の中国の博物館などから117件の文物が出展され、そのうち52点が国家一級文物であることや曹操の「袞雪」の拓本や銀縷玉衣について記された上で、展示品を24時間監視していることが述べられている。また、2010年2月5日付けの『人民日報海外版』・「穿越千年的歷史回響—“赤壁懷古—大三国志展”參觀側記」では、曹操の「袞雪」の拓本や銀縷玉衣に加えて銅雀台の模型について述べており、日本での「大三国志展」の観覧者数が日本での中国文物展で最多記録を樹立し、日本の主要マスコミにも取り上げられたことも記している。
- 30 王景峯「“大三国志展”在河南博物院隆重開幕」(『中原文物』2010年2期)によると、35の中国の博物館などから140余件の文物が出展されていることが述べられ、加えて展示における文物と『三国志演義』の故事の融合から『三国志』に関する歴史文化の概観が観衆に提示されていると指摘している。
- 31 『国立歴史博物館』HP・張譽騰「博物館對歷史的詮釋：談大三国特展」(<http://www.nmh.gov.tw/zh-tw/Exhibition/Content.aspx?Para=2%7C21%7C555&unkey=22>) 参照。
- 32 『華視新聞網』HP・「三國特展明登場 3D 看孔明分天下」(<http://news.cts.com.tw/cna/life/201006/201006040488524.html>) 参照。
- 33 筆者が拝見するか、入手した中国での『大三国志展』の図録は湖北省博物館『千古英雄—「大三国志展」帰国滙報展』(湖北人民出版社 2009年)、国立歴史博物館編纂委員会〔編〕『千古英雄—「大三国特展」』(国立歴史博物館〔台北〕2010年)である。特に『千古英雄—「大三国特展」』の末尾には、日本での『大三国志展カタログ』にも掲載した歴史書『三国志』と『三国志演義』を比較した年表と類似した年表が載っている。
- 34 芸能人としては、例えばドラマ『三国』で呂布を演じた何潤東(ピーター・ホー)氏(『中時電子報』HP・「何潤東扮呂布見銅車馬想赤兔馬」<http://showbiz.chinatimes.com/2009Cti/Channel/Showbiz/showbiz-news-cnt/0,5020,110511+112010062000014,00.html>)や許慧欣(イボンヌ・シュー)氏(『中

- 時電子報』HP・「許慧欣看三國 扮卡卡湊一國」<http://showbiz.chinatimes.com/2009Cti/Channel/Showbiz/showbiz-news-cnt/0,5020,110511+112010062100014,00.html>) や郭采潔 (アンバー・クオ) 氏 (『中時電子報』HP・「關公加持 帶旺郭采潔抱獎」<http://showbiz.chinatimes.com/2009Cti/Channel/Showbiz/showbiz-news-cnt/0,5020,110511+112010070200026,00.html>) などが挙げられる。
- 35 『中時電子報』HP・「鐵獅玉玲瓏 風趣說唱大三国 澎恰恰, 許效舜帶民衆神遊歷史」(2014年1月現在, 見る事ができない)。
- 36 『中時電子報』HP・「宇峻奥汀線上遊戲結合三国藝術 進駐國立歷史博物館開展」(2014年1月現在, 見る事ができない)。
- 37 コスプレのことも含めて, 『新浪網』HP (『成都商報』)・「《大三国志展—蜀漢巡礼》邀您共品三国」(<http://ent.sina.com.cn/x/2010-11-03/05333134363.shtml>) 参照。
- 38 成都での大三国志展のイベントについては, 『成都武侯祠博物館官方网站』・「《大三国志展—蜀漢巡礼》活動安排」に記載がある (<http://www.wuhouci.net.cn/ArticleShow.asp?ArticleID=1526>)。映像としては, 『酷6網』・「大三国志展 蜀漢巡礼 今日芙蓉開展」で見ることができる ([http://v.ku6.com/show/POXAv9HUA\\_n8SbZz.html?from=my](http://v.ku6.com/show/POXAv9HUA_n8SbZz.html?from=my)) (2014年1月現在)。
- 39 『北京週報日本語版』・「1700年の時を超える文物と映像 大三国志展」は以下のホームページでも読むことができる。  
[http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content\\_190266.htm](http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content_190266.htm)  
[http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content\\_190266\\_2.htm](http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content_190266_2.htm)  
[http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content\\_190266\\_3.htm](http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content_190266_3.htm)
- 40 『北京週報日本語版』・「1700年の時を超える文物と映像 大三国志展」。  
[http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content\\_190266\\_2.htm](http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content_190266_2.htm)
- 41 『北京週報日本語版』・「1700年の時を超える文物と映像 大三国志展」。  
[http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content\\_190266\\_2.htm](http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content_190266_2.htm)
- 42 『北京週報日本語版』・「1700年の時を超える文物と映像 大三国志展」。  
[http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content\\_190266\\_3.htm](http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-04/10/content_190266_3.htm)
- 43 金子前掲論文参照。
- 44 金子前掲論文参照。
- 45 金子前掲論文, 大塚英志『仮想現実批評—消費社会は終わらない』(新曜社 1992年) 参照。
- 46 金子前掲論文参照。
- 47 金子前掲論文参照。
- 48 金子前掲論文参照。
- 49 『三国志演義』は完成に至るまでの各時代の民衆の期待・願望を受け入れつつ形を変えながら徐々に形成され, 最後に歴史にできるだけ矛盾しない内容にまとめ上げられたものである。『三国志演義』に関する研究は数多く存在するが, ここでは最近

( 94 )

の代表的な著作として、金文京『三国志演義の世界 増補版』（東方書店 東方選書  
39 2010年）を挙げておく。

50 金子前掲論文参照。